

通し番号は事務局  
で記入します。

大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー No.2008-1

# 日中戦争前期における中国共産党の党軍関係について\*

## 共産党史研究再考

2008年10月3日

田中 仁†

大学院生のみが執筆する  
場合は、指導教官の許可  
を受けた旨を明記。

\* 謝辞、付記等を記入。

† 大阪大学大学院法学研究科教授。

〒562-8558 箕面市粟生間谷東 8-1-1 大阪大学箕面キャンパス  
tanakahi@law.osaka-u.ac.jp

所属、連絡先  
を記入。

## 【原稿執筆に関するガイドライン】

1. 原稿は横書きで作成する。用紙は A4 縦, 余白は上下左右とも 25mm。日本語のフォントは MS 明朝, 英数は Times New Roman, 中国語は SimSum。フォントサイズは 10.5。
2. 本文は「 , 「 , …と 1), 2), 3) …」に区切る。最初に「はじめに」, 最後に「むすび」を置いてよい。
3. 句読点は全角の「 , 「 , 。」を用いる。句読点は括弧を閉じた後に置く。
4. 括弧は原則として全角とする (英語表記を除く)。
5. (1) 数字は, 熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字とする。ただし「兆, 億, 万」などの漢数字を用いてもよい。  
(2) 分数は「1/2」とせず, 「2 分の 1」と書く。
6. (1) 年号は原則として西暦を用いる。  
(2) 必要に応じて, 西暦の後に元号などを括弧に入れて併用してもよい。  
例) 1930 (昭和 5) 年
7. (1) 度量衡の単位は, 原則として記号 (m, kg など) を用いる。  
(2) 特に必要な場合, 「担, 斤」などを用いてもよい。
8. (1) 注記は半角のアラビア数字 (1, 2, 3…) で示し, 各ページ末に置く (文末脚注としない)。  
(2) 注記を示す記号は句読点および括弧の前に附す。
9. 典拠を示すことのみを目的とする注記は行わず, 典拠は文末に示す。  
例) [ 田中 2002 : 3-13 ] (同一著者の同一年の文献が複数ある場合は, 2 つ目以降, 発行年 + b, c… , と表記して区別する)
10. 本文と注記で用いたすべての文献を「文献」として本文の最後の一括して表示する。論文の場合は掲載ページを附す。  
例) 石川禎浩 (2006), 「通史と歴史像」飯島渉・田中比呂志編『21 世紀の中国近現代史研究を求めて』東京: 研文出版 pp.85-101.  
高橋伸夫 (2006), 『党と農民 中国農民革命の再検討』東京: 研文出版。
11. 図表は本文中に挿入し, 図 1 , 図 2… , あるいは表 1 , 表 2… と通し番号を附す。

## はじめに

わが国における中共党史研究の現状について、高橋伸夫は「研究上の方向感覚の喪失」に起因する研究の衰退・停滞 中共の「正統史観」から距離を置きつつどのように再構成するかについて基本的戦略を描くことができなかった と概括したうえで、「断絶 連続」(革命は社会の断絶をもたらしたのか、それとももたらさなかったのか)および「構造 行為者」(革命は社会経済構造の必然的産物か、それとも構造とは無関係に革命家集団が持ち込んだものか)という革命認識に関わる2つの次元をふまえた中共党史叙述の「4つの解釈図式」(「構造 断絶」「構造 連続」「行為者 断絶」「行為者 連続」の各モデル)を提示する[高橋 2006]ここで高橋が中共党史にかかわるナラティブを4象限に整理し、なおかつ中共中央党史研究室『中国共産党歴史』(2002)に代表される公式党史を「構造 断絶」モデルに指定することによって、これまでの諸研究の叙述の質を吟味・意識化して「構造 断絶」モデルに代替する研究戦略を提唱していることは、有意義な問題提起であろう。

...

皖南事変を契機としてそれまでの党軍関係に存在していたある種の歪みが結果的に正されることになったが(後述)、こうした背景下の中共権力は、延安整風運動を経て1949年の国家権力奪取を可能にする権力編成を獲得する[高 2000]従って、延安整風運動の前段階にあたる約800日間における中共権力の実態解明は、1950年代から1970年代なかばにいたる毛沢東時代の中国政治の構造と特質を検討するための意味のある研究課題でもあるとしなければならない。

節は ... , ... , ... で示す。  
フォントサイズは 12。

### ・『中共中央文件選集』にみる「中央」文献の性格

中央档案馆編『中共中央文件選集』(1989-92)には、本章が対象とする1938年11月7日から41年1月5日にいたる時期の178文献が収録されている。まず、この178文献の性格について検討する。

項は 1) ... , 2) ... , 3) ... で示す。  
フォントは MS ゴシック, フォント  
サイズは 10.5。

#### 1) 作者について

文献の作者は、「中央委員会」7、「政治局」3、「中央」31、「書記処」84、「軍委」20、軍委をのぞく中央機関16、個人23である。

...

#### 2) 文書の形式について

形式に注目すると、178文献のうち、「決議」が1、「決定」が15であるのに対して、「指示」が136件と全体の4分の3を占めている。このほか「通知」と「訓令」がそれぞれ2件確認できる。

...

当該時期における決議が1939年10月10日の「中央關於反奸細鬭争的決議」の1件に過ぎないことは、1935年1月~38年9月に9件の「決議」が確認しうることと明らかな対照を確認することができる。このことは、6期6中全会の前後において中共権力中枢部における質的転換があったこと、換言すれば、この会議を契機として「中共は毛沢東を中心として団結しなければならない

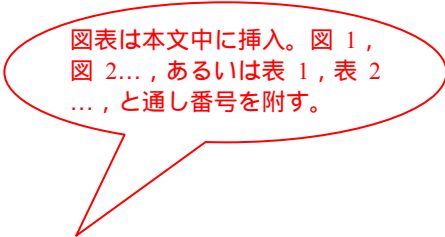
い」という王稼祥が伝達したコミンテルンの指示をふまえた権力中枢の再編の結果であったとしてよいであろう<sup>1</sup>。

### 3) 文献の来源と形態

『文件選集』所収の178文献の来源は、「原件」36、「原抄件」89、「原複写件」1、「原油印件」29であり、また刊行物からの収録として『新中華報』5、『解放』7、『共産党人』12、『六大以来』4がある<sup>2</sup>。

また「電報」による意志伝達を前提としていることを確認しうる文献は67件である。このことは、当該時期における中共中枢部と下部組織との意志疎通のかなりの部分が電報によって行われていたことを示している。

…



### むすび

表4が示すように、延安の指示を受け取る中央局・分局における党軍関係はその中枢に位置する人物に中枢的人物の兼任と、少なからずの不在者が見られる。従って、本章が考察の対象とする時期における中共の党軍関係については、その相互関係に関してさらに踏み込んだ検討がなされなければならない。

この時期の中共の党軍関係におけるもうひとつの問題は、中央と新四軍との関係である。すなわち政治局員である項英が東南局書記・

表4 第一八集団軍総部，北方局，軍委前方分会の成員

中共中央 北方局		第一八集団軍 總司令部		中央革命軍事委員會 前方分委員會	
常委	朱德	總司令	朱德	書記	朱德
常委	彭德懷	副總司令	彭德懷	副書記	彭德懷
書記	楊尚昆				
常委	朱瑞 (-39.4)				
		參謀長	葉劍英		
		副參謀長	左權		
		政治部主任	王稼祥		
		野戰政治部主任	傅鐘 (-40.5)		
			羅瑞卿 (40.5-)		
		野戰政治部副主任	陸定一		
				委員	任弼時
				委員	張浩
				委員	林彪
委員	聶榮臻			委員	聶榮臻
				委員	賀龍
				委員	劉伯承
委員	關向應			委員	關向應
委員	鄧小平				
委員	彭真				
委員	程子華				
委員	郭洪濤				

新四軍軍長・軍事委員會新四軍分会書記を兼任することによって、組織上、両者の関係の核心部

<sup>1</sup> 1937年11月に王明・康生らモスクワに滞在していた中共政治局のメンバーが帰国し、書記処の集団指導体制が敷かれた。この後、延安の中央と武漢に置かれた長江局とのあいだの意志疎通に深刻な齟齬が発生、コミンテルンは、王稼祥を介して「毛沢東を首とする指導のもとで問題を解決すべきであり、指導部には親密に団結するという雰囲気が必要である」と指示した。38年9~11月の6期6中全会はこのコミンテルン指示をふまえて開催された。

<sup>2</sup> このほか「目次」で『毛沢東選集』を指示し未収録の文献が6件である。

分に位置していたものの、非党員の葉挺を軍長に戴いていたこと、および項英をふくむ軍委新四軍分会の全成員が中央軍事委員会の成員でなかったことは、第一八集團軍總部・軍委前方分委員会と顕著な相違が存在していた。

…

2行にわたる場合は、ぶら下げ2字。

## 文献

石川禎浩 (2006) 「通史と歴史像」 飯島渉・田中比呂志編 『21世紀の中国近現代史研究を求めて』 東京：研文出版 pp.85-101.

高橋伸夫 (2006) 『党と農民 中国農民革命の再検討』 東京：研文出版.

…

中共中央党史研究室 (2002), 『中国共産党歴史』 (第1巻) 北京：中共党史出版社.

編 (1986) 『朱徳年譜』 北京：人民出版社.

編 (1989) 『周恩来年譜』 北京：人民出版社・中央文献出版社.

編 (1993) 『毛沢東年譜』 (中巻) 北京：人民出版社・中央文献出版社.

中共中央党史研究室張聞天伝記組編 (2000) 『張聞天年譜』 (上下) 北京：中共党史出版社.

中共中央文献研究室編 (2000) 『陳雲年譜』 (上巻) 北京：中央文献出版社.

中共中央組織部・中共中央党史研究室・中央档案馆 (2000) 『中国共産党組織史資料』 (第3巻) 北京：中共党史出版社.

中国人民解放軍歴史資料叢書編審委員会 (1994) 『八路軍文献』 北京：解放軍出版社.

(1988, 1994) 『新四軍文献』 (1)(2) 北京：解放軍出版社.

中央档案馆編 (1989-92) 『中共中央文件選集』 (18巻) 北京：中共中央党校出版社.

周国全・郭徳宏 (1991) 『王明年譜』 合肥：安徽人民出版社.

大阪大学中国文化论坛 讨论文件 No.2008-1

Discussion Papers in Contemporary China Studies, Osaka University Forum on China No.2008-1

论中日战争前期中国共产党的党军关系

中共党史研究的再思考

田中 仁

On party-Military Relations in Chinese Communist Party in the Early Period of the  
Sino-Japanese War : Studies on the CCP History Revisited

TANAKA Hitoshi

摘要

担当委員 ( \* \* \* )